

推しドボク——見つけたい、語りたい——

戦国の山城に「推しドボク」を探す

——松尾山城から見る関ヶ原の戦い——

学生委員の素直な好奇心を原動力に、気になる土木構造物や土木の取り組みにスポットを当て、「推しドボク」を紹介する本企画。現地での取材を通して関係者の方々の熱い思いやその土地の空気に触れることで、土木の魅力や価値を見つけ出し、取材を通して学生が感じた「推しポイント」を語る。今回のターゲットは、歴史のターニングポイントである関ヶ原の戦いで重要な役割を果たした「松尾山城」。戦国時代の驚くべき改修技術が、今の土木にどうつながっているのか？そして、歴史的な遺構をどう守り、どう生かしていくべきか？松尾山城の「推しポイント」を探求していく！

推しと 出会いたい

松家——なぜ今回、松尾山城に注目しようと思ったのですか？

橋本——正直なところ、日本史は中学生の時までしか学んでおらず、戦国武将の名前ももう覚えた。そんな中で、小さいころに家族で観た関ヶ原の戦いを題材にした大河ドラマを思い出し、今回、歴史をテーマ

に取材したいと考えました。日本の歴史を大きく変えた転換点でもあり、誰もが知っている関ヶ原の戦いについて取り上げようと思い、調べていく中で、松尾山城は、石田三成が関ヶ原の戦いに備えて、わずか1カ月という短期間で本格的な山城へと改修させたということを知り、大きな衝撃を受けました。重機もない400年以上も前の時代に、山を削って、土を盛り、堅固な山城を築

き上げるスピードと技術に強く興味を持ったことが、松尾山城に注目したきっかけです。

永野——1カ月という短期間で、これほどの規模の山城をどのように改修したのか、そして、松尾山城の改修から400年以上たった今も壊れずに残っているのはなぜなのか、土木を学ぶ私たちにとって、とても気になる場所ですね。

橋本——歴史を通じて先人たちの知恵を学ぶことで、今の私たちが直面している防災や災害復旧、また私たちが目指すべき持続可能な社会など、現代に応用できる新たな発見もあるのではないのでしょうか。

松家——関ヶ原の戦いを土木工学という切り口から見ること、歴史は複雑で難しいというイメージから、もっと身近な存在になるといいですね。

永野——歴史の知識がない私たちがからこそ見える、教科書には載っていない土木工学的な視点から、関ヶ原の戦いの新たな一面を「推しドボク」で深掘りしていきたいと思います。

推しを 見つけに

〔取材協力者〕

富田 真一郎氏 関ヶ原町役場

関ヶ原の戦いから400年以上たった今もお、多くの防御構造が現存している松尾山城を訪れ、松尾山城の保存や整備に携わる関ヶ原町役場の富田真一郎氏にお話を伺った。

——松尾山城について教えてください。



写真1 見学案内・取材に応じていただいた富田氏

富田——松尾山城は、関ヶ原の戦いで西軍の小早川秀秋が陣を置いた場所です。関ヶ原町の南西部に位置する標高293mの松尾山にあり、関ヶ原盆地で最も高い標高にあるため、関ヶ原古戦場を一望できます。西美濃最大級の山城として、その規模は東西400m、南北250mにもわたります。曲輪や堀切、土塁など多くの遺構が今も残っており、関ヶ原町の史跡に指定されています。

——松尾山城は何のために建設され、関ヶ原の戦いでどのような役割を担っていたのでしょうか？

富田——松尾山城は、1521(大永元)年から1528(大永8)年に浅井亮政が美濃侵攻に伴い、家臣を派遣し、松尾山城を整備しました。

しかし、織田信長の近江侵攻により織田家臣が在城し、1575(天正3)年には、廃城となりました。その後、1600(慶長5)年に西軍の石田三成が関ヶ原の戦いに備え、大垣城城主・伊藤盛正に命じて、松尾山城跡を改修させました。現存する城跡の遺構のほとんどはこの改修時のもので、盛正がたった1カ月で築いた本格的な山城です。石田三成は西

軍総大将の毛利輝元を招き入れようとしたが、輝元が大坂城にとどまったため、松尾山城には関ヶ原の戦い前日の9月14日に小早川秀秋が約1万5000人の兵を率いて入城しました。最終的に、秀秋が東軍へ寝返り、東軍勝利のきっかけを作るといふ歴史的な役割を担いました。

——松尾山城には、どのような遺構が残っているのでしょうか？

富田——松尾山城には、兵士が駐屯できるように、もともと起伏のある土地を平らにした曲輪やその周りを囲むようにして下からの敵の攻撃に備える土塁、敵が斜面を登りづらくするためにもとの斜面を削って

より急角度にした切岸など、さまざまな遺構が400年以上たった今も残っています。いずれも松尾山のもともとの地形を活用しています。主な改修は主郭周辺に集中しており、主郭の四方を土塁で囲む構造は、戦国時代後半の特徴で、関ヶ原の戦いに備えて、改修されたものだと考えられます。その他にも主郭には、L字型に土塁が設けられ、城の出入りに直線的に侵入ができない杵形虎口など、当時のさまざまな技術が用いられています。最近の調査で、ただで構成されていると考えられていた主郭の土塁から、実際には石積みによる補強が行われていた痕跡が発見され、高度な技術が用いられていたことが分かりました。

——なぜ1カ月という短期間で改修工事を行うことができたのでしょうか？

富田——東の曲輪は、関ヶ原古戦場

側にあるため、周囲を土塁で囲み、特に北側の土塁を高く築くことにより、敵からの攻撃に備えています。

一方で、西側の曲輪は起伏がある場所を削り取り、地面を平らにする作業が甘く、土塁も未完成で、1カ月という短期間での改修には限界があり、守るべき場所に優先順位を付けていたのだと考えられます。浅井亮政の時代には、中山道・伊勢街道・北国街道の交差点という立地から西側が正面になっており、防御の重要性も高かったのですが、関ヶ原の戦いでは、関ヶ原古戦場のある東側の防御が重要だったため、西側の改修が後回しにされたのだと思います。

——これまでの調査で、石積みによる補強の他に分かっていることはありますか？

富田——松尾山城では航空レーザー測量を活用した調査が行われています。このデータから、主郭の形や周囲を取り囲む土塁のラインがはっきりと確認でき、東と西で土塁の完成度に大きな差があることが明確に分かりました。さらに、人為的に地面を平たんにした痕跡が新たに見つかり、松尾山城は従来考えられていた

範囲よりも関ヶ原古戦場側に広がっている可能性があることが分かりました。

——今後、松尾山城の全貌を解き明かすために、詳細な調査が必要になってくると思いますが、富田さんはどんなところを調査したいと思いますか？

富田——土塁の断面を調査し、どのように積まれているのかを確認したいです。積み方によって誰が作業したのか分かるかもしれませんし、出土品から年代も分かってくるのではないかと思います。また切岸の表土を剥いて、どこまでがきちんと整備されているのかを確かめることができれば、まだ誰も知らない松尾山城の全体像が浮き彫りになると思います。

——松尾山城の維持管理の現状と将来に向けた課題について教えてください。

富田——松尾山城では、地元の松尾自治会の方々が年に1回の清掃作業や登山道の整備を継続して行っております。しかし、関ヶ原町全体の人口は約5900人まで減少し、高齢化も進んでいることから、今後、地

元住民だけで松尾山城を維持し続けることは難しくなると思います。また、遺構の保存状態にも問題があります。主郭には、関ヶ原古戦場の展望を楽しんでもらうために設置されているベンチがありますが、土塁の上に設置されており、来訪者が登ることによって、土塁がどんどん削られてきています。さらに、松尾山城の正確な構造を解明するために発掘調査が必要不可欠ですが、松尾山城の敷地は私有地であることや町の予算確保の難しさから、まだ実施できていません。

——これらの課題に対し、町ではどのような対策や取り組みが考えられているのでしょうか？

富田——関ヶ原町では、地域住民だけで関ヶ原古戦場を守るのではなく、町外からの関係人口を増やす草刈りワークショップや稲作放棄地にお花を植える取り組みなどを開催し、関ヶ原町に関わってもらう機会を作っています。県外から参加してくださる方もいます。また、2023年には登山道の階段を整備し直し、来訪者が安全に松尾山城を見学できる環境づくりも進めています。

城郭用語集

- ①主郭：城の中心として機能した曲輪。城内の一番高いところに位置し、周囲は急峻（きゅうしゅん）な切岸に囲まれている。本丸ともいう。
- ②曲輪（くるわ）：堀や土塁、壁などで囲まれた城内の区画。
- ③土塁（どるい）：曲輪の周囲に土を盛り上げて敵の侵入を防ぐ土手。曲輪を全周するような土塁は戦国時代後期に現れた。
- ④切岸（きりぎし）：曲輪周辺の壁面のことで、人工的に削って急斜面にすることによって、敵が登りにくくしている。
- ⑤堀切（ほりぎり）：尾根を断ち切るように造られた堀。敵が尾根伝いに攻め込んでくるのを防ぐために、道を完全に寸断して進行を阻む。
- ⑥枡形虎口（ますがとぐち）：虎口とは城出入り口のことをいう。城内側にL字状に土塁が設けられ、直線的に侵入できない虎口のことをいう。

図1 松尾山城マップ
（監修：滋賀県立大学中井均名誉教授）



その他にも、ただ景色を楽しんで帰るのではなく、400年以上残る遺構の価値をもっと多くの人に理解してもらえよう看板の設置なども行われています。最近では、神奈川県横浜市内で開催され、2025年度の来場者が2万3000人にも上る「お城EXPO」という全国のお城に関わる方々が集結しPRするイベントにも参加し、松尾山城の魅力発信にも力を入れています。

(2026年5月15日(金)松尾山城にて)

(聞き手・橋本、松家、永野)

推しを語り合う

永野——松尾山城の魅力をたっぷり伺いましたが、「推し」は見つかりましたか？

橋本——私は、1カ月という短期間で改修を行ったということが推しポイントだと思います。当時の施工者の熱意や緻密な施工計画がなければ、1カ月という短期間での改修は難しかったのではないかと思います。

永野——確かに、その熱意や緻密な計画があったからこそ、関ヶ原の戦いから400年以上たった今も遺構が残っているのかもしれないですね。今はさまざまな技術が進歩していますが、災害が起きると崩れてしまう場所もたくさんありますよね。それでも、松尾山城が、今もお崩れることなく残っているのは、その土地特有の地形を生かしているからなのかなと感じました。

松家——そうですね。地形を見極める力があってこそその改修工事だったのではないかと思います。松尾山城の遺構が、400年以上たった今もそのままの形で残っているということから、先人たちの知恵や自然との向き合い方を学ぶことができるのではないのでしょうか。そうした考え方を、これからのまちづくりやインフラ整備にも生かしていけるといいなと思います。

橋本——短期間での改修という面では、現代の災害復旧に応用できると思います。その他、切岸や堀切で出た土をそのまま土塁として使用するなど、その場所にある自然の材料のみで完結するサイクルができています。

ことは、現代の輸送コストや廃棄物問題の解決につながるのではないかと思います。先人がどのようにして土木を担ってきたのか、今一度、立ち止まって考えてみたいですね。

富田——しかし、どうやって作ったのかということは想像し得ないもので、松尾山城にある遺構の構造をぜひ解き明かしてほしいと思います。

永野——まさに土木工学の分野との協働も求められますね。

富田——はい、考古学という学問だけで解決しようとするのではなく、いろんな学問と連携して、違分野の話を聞くことで、異なる視点から得られる気付きがあると思います。

松家——それぞれの分野から何が生まれるか、私たちは今何をできるかを考えていきたいです。

橋本——最後に、富田さんは松尾山城について、特に推したいポイントがありますか？

富田——松尾山城は、関ヶ原古戦場を一望できる絶好の場所だということと皆さんに知ってもらいたいと思います。私が一番好きな場所は、主郭を南側から見たゾーンです。敵の直進を拒む90度の枅形虎口や急角

度にそぎ落とされた切岸、守りやすいように斜めにつけられた道など、この場所には戦国時代最終段階の高度な技術がギュギュッと凝縮されています。景色だけ見て帰るのではなく、グルッと巡って、これが1600年に関ヶ原の戦いの前に作られた土のお城だという部分をぜひ知ってほしいですね。

橋本——関ヶ原の戦いは、教科書やドラマでしか観たことがなかった中で、昔に起きた難しい出来事というイメージでした。しかし、今回の取材を通じて、戦国時代にもインフラを整備するために、多くの人が尽力していたことが分かりました。当時の土木技術や人々の工夫は、今の私たちに、新たな視点を与えてくれるかもしれないと感じ、とてもワクワクしました。

松家——関ヶ原の戦いを土木の視点から見ると、教科書だけでは分からない新たな魅力が見えてきます。皆さんもぜひ、関ヶ原町に足を運び、自分たちだけの「推しポイント」を探してみてください！

(学生編集委員・橋本青依、松家茉莉子、永野愛季)